

鯨 統一郎

Kujira Tōichirō

ミレニアム  
千年紀末古事記伝  
ONOGORO

角川春樹事務所

角川春樹事務所

ミレニアムこじきでん

千年紀末古事記伝 ONOGORO

著者 ぐじら どういちろう  
鯨 統一郎

2000年10月18日第一刷発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川春樹事務所  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-27二葉第1ビル

電話 03(3263)5247(編集)  
03(3263)5881(営業)

印刷・製本 中央精版印刷 株式会社

フォーマット・デザイン 芦澤泰偉  
表紙イラストレーション 門坂 流

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。  
定価はカバーに表示してあります。  
落丁・乱丁はお取り替えいたします。

ISBN4-89456-769-5 C0193  
©2000 Tôichirô Kujira Printed in Japan  
<http://www.kadokawaharuki.co.jp/>

ミレニアム  
千年紀末古事記伝

ONOGORO

鯨 統一郎



ハルキ文庫



\* 古事記の真相に触れています。



目次

|                                  |     |
|----------------------------------|-----|
| 序                                | 9   |
| 一、 <small>あめつち</small> 天地の初め     | 15  |
| 二、 <small>おのころ</small> 淤能碁呂島     | 23  |
| 三、二神の国生み                         | 35  |
| 四、 <small>よみのくに</small> 二神の神生み   | 47  |
| 五、 <small>よみのくに</small> 黄泉国      | 62  |
| 六、 <small>みそぎはらへ</small> 禊祓と三貴子  | 81  |
| 七、 <small>スサノヲ</small> 須佐之男の神やらひ | 93  |
| 八、 <small>うけひ</small> 二神の誓約生み    | 113 |
| 九、 <small>あめ いわやど</small> 天の石屋戸  | 125 |
| 十、 <small>オホゲ ツヒメ</small> 大気都比売神 | 158 |
| 十一、 <small>やまたをろち</small> 八俣の大蛇  | 176 |

十二、須佐之男命しんえいの神裔しんえい

十三、因幡いなばの白兔しろうさぎ

十四、八十神やそがみの迫害

十五、根すくなびこなの国訪問この

十六、少名毘古那神みもろやまと御諸山あめのほひのの神あめのわかひこ

十七、天菩比神あめのほひのと天若日子あめのわかひこ

十八、大国主神ニギハヤヒの国譲り

十九、邇邇芸命ニギハヤヒの生誕

二十、天孫このはなのの降臨さくやひめ

二十一、木花之佐久夜毘売このはなのさくやひめ

解説 大多和伴彦



千年紀末古事記伝・ONOGORO



## 序

雷<sup>いかづち</sup>がきっかけだった。

二十五年かけて、いま稗<sup>ひえだの</sup>田阿礼<sup>あれ</sup>が倭<sup>やまと</sup>の総ての歴史を感知し終えた。

なぜヤマタノヲロチの腹の中から草薙<sup>くさなぎ</sup>の剣<sup>つるぎ</sup>が出てきたのか。

もともと伊邪<sup>いざ</sup>那岐<sup>なき</sup>が手にしていた草薙<sup>くさなぎ</sup>の剣<sup>つるぎ</sup>が、ヤマタノヲロチの腹の中から出てきたことは長い間の謎<sup>なぞ</sup>だった。その訳が今、雷鳴<sup>らいめい</sup>を聞いた瞬間<sup>しゅんかん</sup>に判<sup>わか</sup>ったのだ。

天武<sup>てんむ</sup>天皇に、忘れ去られてしまった古<sup>いにしえ</sup>の真<sup>ま</sup>の史<sup>ふみ</sup>を取り戻<sup>もど</sup>せと仰<sup>おほ</sup>せつかってから、はや二十五年の歳月<sup>さいげつ</sup>が流れてしまっている。世は天武天皇の姪<sup>めい</sup>の元明<sup>げんめい</sup>天皇の治世<sup>ちせい</sup>に移り変わった。早熟<sup>さくじく</sup>だった稗<sup>ひえだの</sup>田阿礼<sup>あれ</sup>に、天武天皇の白羽<sup>しろう</sup>の矢<sup>や</sup>が立ったのは十歳の時だった。いま稗<sup>ひえだの</sup>田阿礼<sup>あれ</sup>は三十五歳の女盛りになっている。

阿礼<sup>あれ</sup>は簑<sup>みの</sup>を被<sup>かぶ</sup>ると、強い雨が降りしきる奈良の町へ出ていった。

向かうは平城京、三条大路の太安万侶<sup>おののやすまろ</sup>の住居である……。

太安万侶は朝からそわそわとしていた。

（今日は何かが起こりそうだ）

文字によって物語を紡ぎ、その書物を永遠に残すという、倭の歴史で初めての事業を元明天皇より仰せつかっている太安万侶は、他の者より心が研ぎ澄まされている。虫の知らせが多く届くのだ。

（この安万侶の勘に狂いはない）

安万侶は五十を過ぎてから突然に禿げあがった頭に手をやった。

（今日は何かが、いや、稗田阿礼がやってくる。間違いない）

胡座の上に置いた右の拳に自然と力が入る。この右手に筆を握り、文を綴るときが来たのだ。

「主様」

襖の向こうから従者が声をかける。

「稗田阿礼様がやって参りました」

「通せ」

安万侶は、はやる気持ちを抑えた落着いた声で答えた。

襖が開いて稗田阿礼が姿を見せる。

「待っていたぞ」

安万侶はそのぎょろりとした目を阿礼に向ける。

「わたくしが参ることが判ったのですね」

「判ったとも」

従者が礼をして引き下がる。襖は閉じられた。

「長かったな」

「はい」

阿礼はその優しげな目を細めて安万侶を見つめた。

大化改新で即位した天智天皇が、二十七年後に薨去こうきよされると、その弟である大海皇子が、

天智天皇の子、大友皇子おおとものみこを討って即位した。この乱は壬申じんしんの乱と呼ばれ、大海皇子は天武

天皇となった。

天武天皇は、兄である天智天皇から、三種の神器を受け継いだ。

そこで天武天皇はひとつの疑問を抱いた。

（この三種の神器は、いったいどのようなにしてわが皇すめらみの家に伝えられるようになったのだろうか）

文字によって物語を記すことは、過去にも何度か試みられたことはある。だが、皇家、すなわち倭の文を記した帝紀、本辞は、散逸し、あるいは虚偽の史を書き加えられ、形を為なさない。

（この国の史を残らず書き記して、後世に伝えなければならぬ）

そう思った天武天皇は、巫女として類い希な能力を有するといわれていた稗田阿礼に、倭の史の初めから現在までの出来事を、残さず感じ取り、話すのだと命じられた。

その話を書き留める役は、当代随一の文章家、太安万侶が仰せつかった。

太安万侶は、天武天皇の仰せを躰が震えるほどの喜びを持って拝命した。

だが、幾千年にもおよぶ倭の全歴史を感知することは並大抵の仕事ではなく、その総てを感知し終えるまでに稗田阿礼は二十五年という歳月を費やしてしまったのだ。

すでに天武天皇はなく、天武帝の姪の元明天皇が奈良の都で倭を統べている。「聞かせてもらおうか。倭の始まりからの総ての史を」

「それが」

稗田阿礼が言い淀んでいる。

「どうしたのだ」

「はい」

阿礼は安万侶の顔を厳しい顔で見つめる。

「何か良くないことでもあったのか」

「この倭の歴史には、ある秘密が隠されていたのです」

安万侶に膝を寄せる阿礼の眼の光は、ますます強くなっている。

「ある秘密とは」

「それは」

阿礼は顔を伏せた。

「どうした」

阿礼は話そうとしない。

「ええい、もどかしい。話すのだ。この安万侶に話すのだ。それが帝みかどのご命令ぞ」

「はい」

阿礼は顔を上げた。

「では」

阿礼は眉まゆをしかめながら安万侶を見た。

「われらがどこから来たか、そのことが明らかになりました」

「われらがどこから来たか……」

阿礼は頷うなずく。

「われらとは」

「倭の民」

安万侶は、漠然とだが、阿礼がなにかとてつもない物語を感知してしまったのではないかと悟った。だが、もう後に引くわけには行かぬ。

「かまわぬ。望むところではないか。われらの出自を、聞かせてもらおうか」

「後悔は致しませぬか」

「せぬ」

安万侶は、阿礼よりもなお強い光をその目に宿した。

「聞かせるのだ。そもそもの始まりを」

安万侶の言葉に、阿礼はゆっくりと頷いた。

「まだ天地ができる前、大きな爆発が起こったのです」

阿礼の声は、少し震えていた。



## 一、天地の初め

大きな爆発が起こった。

塊<sup>かたまり</sup>が膨れ上がった。爆発して脹<sup>ふく</sup>れ続ける塊の中に、爆発に似た凶暴な“意志”が生まれた。

はじめ、“意志”はただ一つの存在だった。だが、理性がなければならぬと高御産巢日<sup>たかみむすひの</sup>神が思った瞬間<sup>ととき</sup>、高御産巢日神が生まれた。

一方で慈悲がなければならぬと神産巢日<sup>かみむすひの</sup>神が思った。そして神産巢日神が生まれた。辺りは漆黒の闇<sup>やみ</sup>だった。

「お前は誰だ」

高御産巢日神が尋ねた。

「私は神産巢日神です」

神産巢日神が答えた。

「吾<sup>われ</sup>の名は高御産巢日神」

高御産巢日神が名乗った。